

## 編集 後記

最近のことです。会議中に、配布資料のページ抜けに気付いたのですが、運悪く作成担当者が休みを取っていて、誰も本人のパソコンを開くことができずに往生したことがありました。

本誌の読者は、規模や数、組織の性質の違いこそあれ、「フィールド」と呼ぶべき現場を持ち、そこで得たデータを扱う立場にあると思います。そのようなデータは、つい先ごろまでは、主に紙に記入され、鍵のかかる部屋の例えばカルテ棚やファイリングキャビネットにきちんと整理されて保管されているのが普通でした。研究のためにそのデータを分析しようとするれば、しかるべき手続きにより許可を得てデータを使用することができました。すでに、自分の裁量範囲だったことも多かったと思います。調査対象者にしても、しかるべき「挨拶」を済ませて本人や組織が応じてくれれば、即座に調査が始まるものでした。

今でも、手続きや流れは同様でしょうが、データは電子化されてハードディスクに書き込まれ、保管場所は本物のフォルダーやキャビネットではなくなりました。タンマツといわれる装置から、IDとパスワードを使ってデータの保管先にアクセスしてダウンロードするスタイルに変わってきています。

つまり、個人情報ゆえに管理が厳重になるのとは性格を異にした、ちょっとしたハードルを越えなくてはならなくなりました。データの在りかは、目の前のハードディスクであっても、手順を踏んで得たアクセス権がなければ、データを垣間見ることさえできないという、やや困ったことになってしまいました。

そのようなことが、若い研究者に何か影響していないでしょうか。

本号に掲載された論文のゲラを拝見して、著者が乗り越えたであろう様々なことがらに思いを馳せてみました。今回は特に、研究対象者にアクセスするために実際にどのようなことがどのような手続きを踏んで行われ、アクセスする権利を得て調査に臨み、ある見通しのもとに自分の手元に置いたデータにアクセスして解析し、その結果、意味のある筋道が析出できたというあたりまでを追ってみました。

現場の業務、調査、活動でひらめいた閃きを論文掲載に漕ぎつけるまでに、例えば解析のための統計パッケージの普及には目を見張るものがありますが、データ入手までの対象者へのアクセスに至るプロセスとともに自分のデータへのアクセスについても、私などの駆け出しころと比べて随分手間のかかるようになったものだと今更ながら感じたのでした。

戯れに不要不急の研究はすまじ、は正しいことでしょうが、熱いうちに打たねば、鉄の加工は成り立ちません。  
(那須郁夫)

## 次号予告 (第60巻・第3号)

### 研究ノート

- 中年期における特定健康診査未受診者の特性  
.....舟橋博子, 他
- 小学生の体型と生活習慣との関連性...大須賀恵子
- 世代間交流事業に対する社会的関心とその現状  
新聞記事の内容分析および実施主体者を対象とした質問紙調査から.....村山 陽, 他
- 地方感染症情報センター担当者に対する研修プログラムの需要.....鈴木智之, 他